視線

私は毎日、天使を見ている。

（渡邉博史著、窓社・3990円）

写真を見続けていると、ふっと宙にさらわれてしまいそうになる、そんな写真集だ。

撮影されているのは、エクアドルの首都、キトのサン・ラザロ精神病院に収容されている人たち。その合間に異様に生々しい壁画や聖像のイメージが挟み込まれている。2001年夏、アメリカ西海岸を中心に活動していた渡邉博史は、友人のつてを頼って18世紀半ばに設立された病院を訪れ、彼らを撮影した。まずポラロイドカメラで撮り「自分のイメージ」を把握してもらうことから始めたという。

写真を見ていると、渡邉がサン・ラザロ精神病院で感じたであろう驚き、戸惑い、そして怖れのような感情の波動が伝わってくる。ここにいるのは人間と神の世界との境界領域にたたずむ人たちなのだ。彼らの顔や身体の輪郭は背後の闇に溶け込み、視線は現実世界を飛び越えて、はるか彼方に向けられているようだ。その脆さと強靭さを併せ持ったデリケートな表情や身ぶりは、これらの写真が奇跡としかいいようのない不思議な力に導かれて成立したものであることを示している。

写真集のタイトルは、ある女性患者の言葉から採られた。彼女は撮影中ずっと話しかけてきて、最後に「天使を見ましたか？」、「私は毎日、天使を見ている」と断言したのだという。彼女にとって天使は幻影ではなく、リアルな実在なのだ。

むろん写真に天使は写っていない。だが写真集のページのそこここに、その気配が漂っているようでもある。

飯沢 耕太郎（写真評論家）